

【事例報告】

ディスレクシア（読字障害）の生徒に、英語の対面授業を続けて

成田あゆみ

なりた・あゆみ

ディスレクシア（dyslexia）とは、読み書きのLD（Learning Disabilities, 学習障害）を指す（加藤 2016: 1）。ラテン語で「失う」を意味する接頭辞の dys- と、「読む」を意味する lexis からなる造語で、1887年にドイツの眼科医 ルドルフ・ベルリン（Rudolf Berlin）が、活字を読めない患者を Dyslexie（失読）と名付けたのが初出とされる（Wagner 1973: 57, 59）。その後、イギリスやアメリカで症例報告が相次ぎ、1920年代にはアメリカの眼科医サミュエル・オートン（Samuel Orton）が研究と教育に尽力。彼が英語教師アナ・ギリングガム（Anna Gillingham）とともに編み出した「オートン・ギリングガム法」は、現在もディスレクシアのための読み訓練の基準でありつづけている。

読める人は忘れがちだが、「人間は生まれつき読めたことはない」（Wolf 2007: 3、訳は筆者）。ヒトは10万年前から話しているが、読むようになったのは5000年ほど前のことにすぎない。そのため人間は読字専用の脳部位を持たず、他の目的のために作られた部位を生後の学習によって「上書き」し、読字能力を獲得する（Dehaene 2009: 53-119）。この「上書き」は幼児期の1年程度で行われ、これが完了した脳は読むという行為が自動化され、高速かつ流暢に文字列を音と意味に変換できるようになる。

この「上書き」がうまくいかない人が存在する。ある年齢を過ぎても読み能力が自動化されない。この状態がディスレクシアである。

ディスレクシアは、日本語では、事故などによる後天性のものと区別するために「発達性ディスレクシア」と呼ぶことがあるほか、「読字障害」「読み書き障害」とも言う。かつては「難読症」「失読症」とも訳された。本稿では「ディスレクシア」と呼ぶことにする。

日本語母語話者の成人ディスレクシアで、日本語がまったく読めないケースは珍しい。多くの場合は程度の差はあれ、読みの正確性の不足（読み間違いが多い）、流暢性の不足（読むのが遅い）、易疲労性（読むと疲れやすい）、つまり「難読」の状態を示す。そのほか、書きの困難（字を思い出せない、考えながら書くと字が乱れる）、さらに音韻性の困難（言い間違いや聞き間違いが多い）などを示す。だが大人になると長年の経験で読みの困難をカバーする方略を確立していることが多く、成人ディスレクシアの判断は難しい。

日本語を母語としつつある子どもの場合、周囲の大人が子どものディスレクシアに気づきやすい時期がいくつかある。ひとつは小学校入学時で、「本を

1. はじめに

筆者が代表を務める「もじこ塾」は、東京・南新宿にある、ディスレクシア（読字障害）のための大学受験生・中高生向けの英語塾である。2020年3月に全国一斉の休校措置が取られ、学校の授業がオンライン化した時期にも、もじこ塾は対面授業による「読み訓練」を続けてきた。本稿では、もじこ塾が2020年、コロナ禍にあっても対面授業を続けるなかで見えてきたこととして、読み訓練が非常に身体性の高い相互行為であり、対面で行う必要があること、また一方でディスレクシアならではのオンライン授業の利点が見られたこと——の2点に焦点を当てて紹介する。

2. 日本におけるディスレクシアと英語

2.1. ディスレクシアとは何か

本題に先立ち、もじこ塾が対象としている「ディスレクシア」とは何かを説明しておきたい。